

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
 大学院生研究 2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		コミュニティ福祉学研究科	コミュニティ福祉学専攻
指導教員	所属・職名		氏名	
	コミュニティ福祉学部教授		長倉真寿美 印	
研究課題名	認知症グループホームの基盤となっている価値観の研究 —M-GTAを用いた運営的環境の設定プロセスの分析から—			
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	コミュニティ福祉学研究科修士課程 2年		林 和秀 印	
研究期間	2016年度			
研究経費	七五千円			

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

認知症グループホームが大切にしてきた、価値観を明らかにするため「玄関の施錠」「食事」「重度化への対応」「看取りへの対応」「地域への解放と支援」の5つの運営的環境へと焦点化を行い、質問用紙を作成。東京都認知症介護指導者、かつグループホームの管理運営を行う立場の者に対して半構造化インタビューを行い、M-GTAによる分析を行った。各運営的環境の設定のプロセスのモデルを作成した結果、「玄関の施錠」及び「食事」において根本にある価値観の相違が認められ、その他においても根本は共通しているが異なる価値観が抽出された。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[認知症グループホーム] [M-GTA] [価値観]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

「背景」

厚生労働省が発表した「新オレンジプラン」では、認知症の有病者数は 2025 年には 730 万人と推計されている。身近な人や近所の人が認知症状態になる可能性がある現代の日本の中で、新オレンジプランには「認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくり」を推進することが明記されているが、「やさしい地域」とは何かについては言及されていない。認知症グループホーム（以下GH）は、認知症状態にある人のみを対象とした唯一のサービスである。その実践は、認知症状態にある人の生活の再構築であり、その方法には「やさしい地域づくり」にとって重要な価値観が存在していると考えられる。また、現実の生活の構築の方法は事業所によって異なっており、その違いや共通点も含めて明らかにする必要がある。

[目的]

GHの運営的環境から価値観を抽出し、その価値観の違いと共通点を明らかにし、その上で、GHが大切にしてきた、認知症状態にある人の生きる姿をどのように捉え、支援していくのかという価値観を明らかにすること

[方法]

まず、GHの歴史と現状の課題と可能性について、文献研究をもとに整理する。次に5つの運営的環境、①「玄関の施錠の運営的環境」、②「食事の運営的環境」、③「重度化への対応の運営的環境」、④「看取りへの対応の運営的環境」、⑤「地域への解放と支援の運営的環境」へと焦点化を行い、質問用紙を作成した。東京都認知症介護指導者、かつGHの管理運営を行う立場の者に対して半構造化インタビューを行い、修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチによる分析を行った。

[結果と考察]

①、②において根本にある【人間観】、【ケア観】において異なる価値観が抽出され、一部共通する価値観はあるものの、【食事観】、【影響に対する価値観】にも違いがあることが明らかになった。また、③、④、⑤は根本にある価値観は共通していたものの、【人間観】、【ケア観】、【食事観】、【影響に対する価値観】、【現実への認識】において異なる価値観が抽出された。

具体的には、①では「施錠しないことを原則」「施錠することを原則」「施錠の有無にはこだわらない」という3つの運営的環境に分類され、「施錠しないことを原則」では「人間本来自由」「人間は地域社会で生きる存在」「『外に出る』』という意思表示は生きる力」という【人間観】が根本に存在する一方で、「施錠を有無にはこだわらない」では「キーワードとしての鍵」「ニーズを捉えたケア提供がポイント」「思考停止が問題」という【ケア観】が根本に存在していた。「施錠することを原則」では、根本には【人間観】があるもののそれは、「『外に出る』』という行為は居心地の悪さへの意思表示」であり、「施錠しないことを原則」にある価値観とは異なるものであった。

②では、「食事の一連の流れにこだわる」に影響を与えている根本的な価値観は、「人は他者との関わりの中で、主体的な存在となる」「人は新たな生活行為を獲得できる存在」「人が自らの生命を生きるための食事という活動」という【人間観】であり、そのうえで【ケア観】が存在している。一方で、「食事の一連の流れにこだわらない」には「意思決定支援が大切」「本人のニーズ中心のケアが大切」「丁寧なケアが大切」という【ケア観】が根本にあり、何を大切にするか視点の視点が異なっていた。

研究成果の概要 つづき

③では、重度化に対する運営的環境は全ての調査協力者において、重度化しても最後まで対応する運営環境を選択していたため、「グループホームは最期まで生活を支える場」という【ケア観】が、共通の根本的な価値観として存在している。しかし、浴槽に入る支援をどのように行うかについては、その運営環境は異なっており、浴槽に入ることを原則とすると、重度者はシャワー浴を原則とする運営環境では、その後に影響を与えている価値観に違いが存在している。「トイレでの排泄は、快適で理に適っている」「浴槽につかることで身体的な機能が向上する」という「認知症ケアの価値観」もまた、共通しているが、そのうえで「GHの役割に対する価値観」においては、「一般的な国民生活とのズレを無くす」ことを重要視するか、「丁寧なケアを提供する」ことを重視するかで異なっていた。

④では、「看取りに積極的に対応する」、「看取りに希望があれば対応する」「看取りに対応しない運営環境」、それぞれに共通して影響を与えている根本的な価値観は【ケア観】であり、「本人の意思表示と家族の思いを尊重」する価値観であった。③と同様に、根本の価値観は共通するものの、そのうえの、【現実への認識】や【ケア観】にはそれぞれ異なる価値観が存在していた。

⑤では、地域への開放と支援を積極的に行う運営環境と、積極的に行わない運営環境に影響を与えている価値観で異なっている点は【ケア観】であり「GHの役割に対する価値観」である。それは「GHは社会に出て、人と人との関係を紡ぎなおす存在」であるのか、あくまで「GHは入居者のために存在する」のであって、入居者の生活上必要なこと以外の活動はすべきではないとするのかという価値観の違いが存在していた。

そして、GHの実践に込められた【人間観】と【ケア観】から、<「人間として観続ける」ための施設しない、という選択><「共生」や「共助」の契機としての食事><人間存在から考える、地域社会を基盤とする重要性の再確認>という、これからの地域づくりのあるべき方向性が示唆された。今後のGHのあり方として、自らの力の源泉でもある、認知症状態にある人たちの生活を支援することを継続して追求していくことが必要であり、その生活支援の営みの中で、その価値観を地域に伝えていくことが基本であることを考察した。

[課題と展望]

課題としては、本研究で生成されたモデルは、「東京都」という範囲を限定した調査に基づく現時点の認知症介護指導者への調査であり、暫定的なものであると言え、今後新たな認知症介護指導者が増えてきた際には、同様の調査を継続する必要がある。また、事象理解の視点として活用する際には、地域ごとの外的な要因を考慮した上で適用すべきと言え、そうすることでそれぞれの地域に合った支援の在り方が構築されていくものと考えられる。展望としては、本研究の調査協力者の中でも今後その運営環境を変える選択をする場合も考えられ、同様の調査を継続して行うことで、その変更の理由から新たな視座が得られる可能性も考えられる。さらに、本モデルをもとに質問紙を作成し、日本のGHを対象とした運営環境の実態調査を行うことで、より現実に即した実態が明らかにできる可能性も考えられる。今後の研究課題としては、本研究によって示唆された、地域づくりの方向性の是非を問うために、GHの活動が地域づくりに資する効果を研究によって明らかにし、社会へと発信することが必要であると考えられる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

特になし (今後発表予定)